

研究集会 **近世初期出版文化の中の謡本**
 — 光悦謡本を例に —

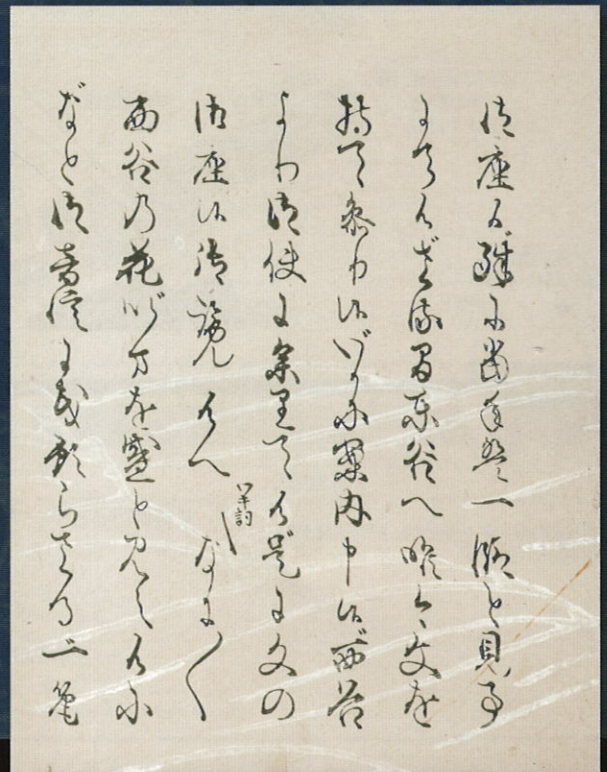
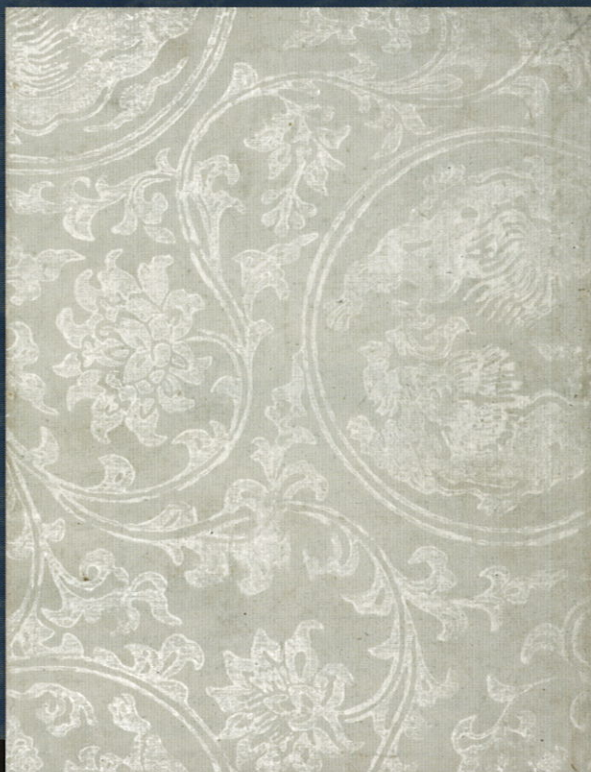
2020.3.7 (土) 13:30~17:00 (開場 13:00)

法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S306 入場無料・申し込み不要

伊海 孝充 法政大学文学部教授

小秋元 段 法政大学文学部教授

竹本 幹夫 早稲田大学名誉教授



近世初期、大陸から新しい印刷技術が持ち込まれ、日本の出版文化がいきなり花開いた。17世紀初頭までは木活字を用いた古活字版が流行し、『伊勢物語』『徒然草』などの国文学書も刊行されるようになる。謡本は、整版印刷による車屋謡本から出版が始まったと考えられているが、その後は元和期ごろまで古活字版が主流であった。つまり、謡本の出版史は出版全体の歴史から切り離して考えることはできないのである。

ただし、楽譜の一種である謡本は他の国文学書とは一線を画す性格をもつ。その特殊性ゆえ、出版研究の中では謡本のみ切り離されて研究されてきたところがある。その乖離が顕著なのが、「嵯峨本」とよばれる古活字版の研究ではないだろうか。謡本のみが「光悦謡本」と呼ばれていることが、嵯峨本の埒外に謡本を置く研究状況を如実に物語っている。

近年、嵯峨本研究では瞠目すべき成果が報告されている。組版や底本に関する新見は、この本、さらには近世初期の出版自体を見直す契機にもなった。同じ趣向を持ち同じ印刷技術で制作された光悦謡本の研究も、こうした成果から学ぶべきものがあるはずである。本研究集会では、嵯峨本研究を光悦謡本研究へ投影させることで、謡本研究全体の更新を目指すものである。

趣旨説明 伊海 孝充

報告 1 小秋元 段

「古活字版の底本と本文 一嵯峨本とその周辺を事例に一」

報告 2 伊海 孝充

「〈素人〉が作った謡本 一光悦謡本の分類・底本・節付試論一」

コメント 竹本 幹夫

討論 竹本 幹夫 小秋元 段 伊海 孝充

伊海 孝充 Ikai Takamitsu

法政大学教授。専門は能楽研究。著書に『切合能の研究』(檜書店、2011年)など。論文に『玉屋謡本の研究(一)～(四)』(『能楽研究』38・40～42号、2013・2015～2017年)など。

小秋元 段 Koakimoto Dan

法政大学教授。専門は軍記物語研究・書誌学。著書に『増補 太平記と古活字版の時代』(新典社、2018年)など。論文に「角倉素庵と『方丈記』」(『法政大学文学部紀要』77号、2018年)など。

竹本 幹夫 Takemoto Mikio

早稲田大学名誉教授。専門は能楽研究。著書に『観阿弥・世阿弥時代の能楽』(明治書院、1999年)など。論文に「早稲田大学図書館蔵 古活字玉屋謡本について」(『早稲田大学図書館紀要』66号、2019年)など。

